無痛性甲状腺炎

がん・感染症センター都立駒込病院副院長
久保田　　憲
（聞き手　山内俊一）

無痛性甲状腺炎の診断と治療、甲状腺機能亢進症との鑑別法についてご教示ください。

＜新潟県開業医＞

山内　無痛性甲状腺炎は比較的多い疾患なのでしょうか。

久保田　甲状腺中毒症という病態だけとらえると、圧倒的に多いのはバセドウ病なのですけれども、１割ぐらいは無痛性甲状腺炎といわれる特異な病態をきたして、それが原因になっていることがあるといわれています。

山内　初診時、この両者はかなり紛らわしい疾患として有名ですが、専門医が診て、これは無痛性甲状腺炎だろうなというものを感じるあたりのポイントを教えていただきたいのですが。

久保田　典型的なバセドウ病は一目見てわかると思うのですが、比較的軽症なものの場合に、あるいは期間が短い場合に、迷うことがあります。無痛性甲状腺炎の特徴は、甲状腺中毒症がそんなに長く続かないということで、通常は病歴を詳細に聴取した場合に、せいぜい２カ月、普通は２～６週間ぐらい。逆に言えば、３カ月以上、明らかに中毒症状が続いているような人はバセドウ病の可能性が非常に高いということになります。

あと、一般には甲状腺中毒症の程度があまり高くなくて、free Ｔ３とfree Ｔ４を測ったとき、典型的なバセドウ病の場合にはfree Ｔ３がかなり高いのに対して、free Ｔ４とfree Ｔ３が並行し、どちらもあまり高くないという場合が多いのです。比を取ることがありますが、free Ｔ３がfree Ｔ４の数値の３倍以上であればバセドウ病を考えていいと思いますけれども、逆に無痛性甲状腺炎の場合には２倍未満であることが多いと思います。

山内　抗体に関してはいかがでしょ

うか。

久保田　バセドウ病の診断の一つの有力な手段はTSH受容体関連抗体で、通常、検査するのはTRAbかTSAbだと思いますけれども、これらは非常に陽性率が高くて、バセドウ病の場合には９割以上といわれていますが、無痛性甲状腺炎の場合には原則として陰性です。ただ、無痛性甲状腺炎の多くは橋本病をベースにしているものの、バセドウ病の経過、あるいは寛解したバセドウ病の患者さんが無痛性甲状腺炎を起こすことがありますので、絶対的な基準とはいえません。

山内　教科書というか、試験などにシンチグラフィがよく出てきますが、これはどうなのでしょう。

久保田　決定的な違いといわれているのが、バセドウ病のような過機能による甲状腺中毒症は放射性ヨードの甲状腺摂取率が非常に高くて、逆に無痛性甲状腺炎に代表されるような破壊性の甲状腺中毒症の場合にはほとんど摂取されないということで、極端に高い場合と、ほとんどゼロという場合の違いで、一番確実な鑑別の根拠になるといわれています。ただ、放射性ヨード摂取率はできる施設が限られていますので、なかなか一般の診療の場では手軽にできる検査ではなく、あまり行われることはないと思います。

山内　そうしますと、実際の現場で一番やりやすいものとしては、非常に機能亢進症状が強いものに対しては、ある程度治療も念頭に置くということで、そこまでいかないものは少し様子を見るというふうに。

久保田　バセドウ病であっても、無痛性甲状腺炎であっても、中毒症の初期の場合には必ずしも抗甲状腺薬を使ってもすぐ効くものではありません。対症的に、最も多く使われるのはβ遮断薬だと思いますけれども、何らかの薬を使いながら、おっしゃるように、少し様子を見るということが有力な方法だと思います。

山内　間違えてしまった場合、しかも治療を開始してしまった場合、大きな問題が生じうると考えてよいのでしょうか。

久保田　一番の問題は、このことが無痛性甲状腺炎が声高に叫ばれる最大の理由ですが、この病態には抗甲状腺薬、チアマゾールとプロピルチオウラシルは禁忌になっています。使ってはいけない。だから、無痛性甲状腺炎が少しでも可能性として考えられる場合で、バセドウ病が確実でない場合には、使うべきではないということです。

山内　様子、経過を見る期間ですけれども、どのぐらいのものでしょうか。

久保田　３カ月以上続かないということですから、その期間見ればいいのですけれども、だいたい１カ月見ていれば、多くの無痛性甲状腺炎の場合にはある程度ホルモン値が下がってくる

気配がありますし、バセドウ病の場合には逆に増悪したりすることもあります。ですから、多くの場合には１カ月様子を見ればわかるのではないかと思います。

山内　１カ月間というのは、症状がある方ですと、やや長い感じがするのですが、２週間だとまだわからないというところですか。

久保田　いや、２週間でもいいかもしれません。ただ、バセドウ病の場合、抗甲状腺薬が決め手になるわけですけれども、どのくらい投与してよくなるかというと、１カ月から、場合によっては３カ月近くかかります。最初の１カ月、投薬が遅れたからといって、患者さんにもよりますけれども、そんなに重大なことにはならないものです。ただ、無痛性甲状腺炎の患者さんにバセドウ病と間違えて抗甲状腺薬を投与した場合に、一つは著しい甲状腺機能低下症をきたして、患者さんが非常に苦しむということもあります。

それから、これはめったにあることではないのですけれども、0.4％くらいの割合で無顆粒球症があります。私自身も実際にみたことがありますけれども、無痛性甲状腺炎の患者さんにバセドウ病ということでチアマゾールを投与して無顆粒球症をきたし、結局１週間から10日、入院することになった。幸いにして、それ以上、生命に危険が及ぶということはありませんでしたけれども、そういうことは患者さんにとって非常に不幸なことだと思いますので、それだけはぜひ避けるということが重要なポイントだと思います。

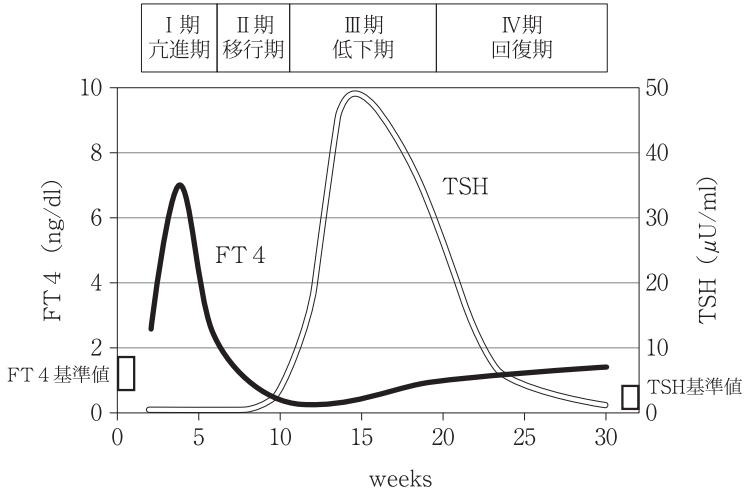
山内　自然経過的には、この病気は完全に治ってしまうと考えてよいのでしょうか。

久保田　ほとんどの無痛性甲状腺炎は自己完結的な病気で、最初、甲状腺機能亢進症になって、その後、元に戻るのですけれども、その後、一過性に甲状腺機能低下症をきたすことが多くて、だいたい３カ月から半年ぐらいの経過で元の正常な状態に戻ることがほとんどだと思います（**図**）。

山内　その甲状腺機能低下症というのは非常に特徴的なものなのでしょうか。

久保田　最初に申し上げればよかったのですが、なぜ無痛性甲状腺炎かというと、亜急性甲状腺炎という同じような破壊性甲状腺中毒症をきたす病気があるわけですけれども、これは甲状腺が非常に痛い。有痛性の甲状腺腫があるわけです。それに対して、痛みがないという意味で無痛性なのです。亜急性甲状腺炎はどちらかというと甲状腺中毒症状が前面に立って、その後、確かに軽度の甲状腺機能低下症をきたすこともあるのですけれども、それはあまり目立たないことがあります。一方で無痛性甲状腺炎はどちらかというとその逆で、甲状腺中毒症状はさほど

図　無痛性甲状腺炎の経過



でもないことが多いのに対して、甲状腺機能低下症は程度がひどかったり、あるいは期間が長かったりすることも少なくありません。

山内　そうすると、時期によりましては、むしろ甲状腺機能低下症のほうと間違えられてしまうこともあるわけですか。

久保田　そうですね。患者さんが甲状腺腫で来たときに甲状腺機能低下症を起こしている。でも、よく聞くと、一過性の亢進症状があった場合に、無痛性甲状腺炎の後半時期の甲状腺機能低下症を見ている場合があるのです。これはこれで注目すべきで、普通、橋本病の甲状腺機能低下症を見ると、永続的なものだということで、ホルモン補充療法を始めるわけですけれども、最初から「あなたは、一生ずっと薬をのまなければいけませんよ」というかたちでフォローする場合があります。無痛性甲状腺炎の後半期の甲状腺機能低下症の場合にはだいたい元に戻りますので、甲状腺機能低下症がひどい場合には補充療法を開始することはかまわないのですけれども、元に戻りうるということを考えながら、場合によって補充ホルモンを漸減したり、中止したりすることを視野に治療をする必要があります。その意味でも、無痛性甲状腺炎というのは一つ知っておいていただきたい病態だと思います。

山内　お話をおうかがいしますと、かなり長い間、上がったり下がったり

を波のように繰り返すケースもありそうなのですが。

久保田　何回か繰り返す方がいらっしゃいます。繰り返すきっかけで一番有名なのは出産です。出産後に無痛性甲状腺炎をきたすことが少なくありません。ただ、妊婦さんみなに起こるわけではなくて、甲状腺の自己免疫、橋本病といわれる病態をもともと持っている方が多いのです。

それ以外の場合では、これはちょっとニュアンスが違うかもしれないですけれども、放射線治療のあととか、あるいは最近はインターフェロンであるとか分子標的薬の中でスニチニブの服用とか、そういう場合にも一過性に無痛性甲状腺炎様の経過をとることがあります。

あと、これは私の経験だけかもしれないのですけれども、橋本病の患者さんが強い精神的な衝撃、ストレスを受けたときに、その後、引き続いてこういう経過をとることがあるような気がします。実際にそういう経験をしたことがあります。

山内　そういった誘因を別にすると、原因に関しては何かわかっているのでしょうか。

久保田　正確なところはわかっていないとしか言いようがないですね。何をきっかけにということもわからないことが多いですから。ただ、ベースに甲状腺の自己免疫がある人が圧倒的に多いです。診断のうえでは、橋本病の一つの病型であると考えられています。

山内　どちらかというと、病型からいうと橋本病に近いものだと考えてよいわけですね。

久保田　そうですね。無痛性甲状腺炎という特定の病気があるわけではなくて、橋本病の一つの病態を表している言葉であると考えたらいいと思います。

山内　ありがとうございました。